己にも病院にも厳しい、名物患者として君臨

「主人はリハビリに対し、自分に厳しいだけでなく、病院にも厳しい名物患者でね。ある時なんか、ナースステーションに車いすで乗りつけ、総務部長を床に座らせて説教していて、私が青ざめた(笑)」と民子さんが言えば、「今では、彼とはメル友(笑)」と原田さん。「でもね、医者も理学療法士たちも、いつ治るとは決して言わねえのよ。がんばりましょうね、それだけよ。だから、時間がかかってもいつかは良くなって、職場に戻れると信じて疑わなかった。その希望が砕かれたのは『そろそろ装具を着けましょう』の宣告だった」

これ以上の回復は望めないという意味と重なり、原田さんはそのとき初めて、「リハビリの病院や施設は元の体に治してくれるところじゃない。日常生活に戻るための訓練学校なんだ」と理解できたそうです。

「いら立ちをノートに書き殴り、それでも解消できない分は、女房が来るのを待ちかまえて八つ当たり。障害を受け入れるまで、随分時間がかかりました」

装具を着け、完全に自宅復帰したのは7カ月後。トイレもお風呂も車の運転も、家族の手助けは敢えて断ったそうです。

「女房には『どうして人に頼まないの』と言われたけど、私のほうが先に逝くとは限らないわけよ。人間いつ1人になるか分からないから、自分でやれるだけやらなきゃ」

がん手術のリスクは意外なところに!?

原田さんに「前立腺がん」が見つかったのは、在宅生活がようやく落ち着き、リハビリ体験をもとにした発明品の販売が軌道に乗り始めた昨年夏でした。

「気まぐれの健康診断ついでの検査で、がんの疑いにつながる数値が見つかった。自覚なんかありゃしません。最近おしっこのキレが悪いなという程度で」

幸いにも初期段階で、全摘手術なら快癒すると言われ即断。しかし、脳卒中後に他の病気をかかえるリスクは、意外なところにありました。

「入院2日目、まひ側の筋肉がげっそり落ちていて驚いた。このままだと歩けず寝たきりになっちまうってね。それで入院中も維持リハビリを受けたいと頼んだのに、脳卒中発症からかなり経っていたから、医療保険を使って理学療法士にリハビリを頼むのは無理だと。これが、ちまたに聞くリハビリ日数制限ってやつかい！　って身にしみて困ったね」

結局、マッサージ師の協力のもと、できるだけの機能維持を3週間。昨年末に退院して、家族も再び胸をなで下ろしました。

「しかし、最近は妻より娘、娘より孫娘のほうがコワイね……。3代目にもなると血が濃くなるのかねえ。6歳にして言うことビシビシ言う。今も酒は飲むけど、孫が『いい加減にしなさい』って叱るからやめざるを得ないんだよ」

妻「家族の心配なんかどこ吹く風よね」
夫「正直なところは、感謝してますよ」

原田さんのホームページ　http://www.paralym.com/

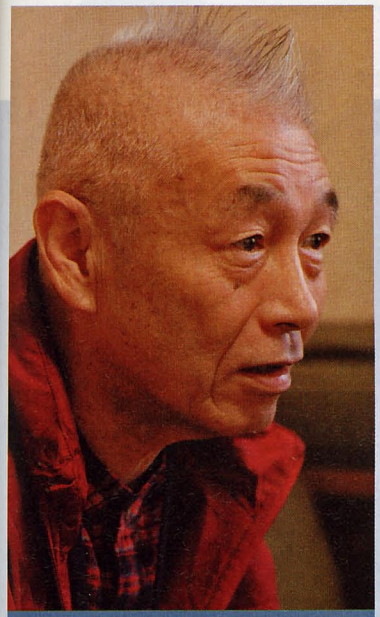
突然倒れた！その時私は、家族は……

ひと口に脳卒中やがんと言っても、経験した人の人生にはひとつ一つ違うドラマがあります。その時、どんなことに本人や家族は悩み、受け止めていったのでしょうか。

取材・文／栗原道子
撮影／松見広信

病気も障害も腹をくくって向き合っていく

若い頃から家庭より仕事優先だった原田太郎さん。5年前に脳卒中で倒れた後、今さら奥様に「これからはよろしく頼む」とは言えなかったそうです。そんなやんちゃ夫の看病も八つ当たりも全部受けとめ、仕事も続けながら支えた奥様。「うちの大黒柱には頭が上がりませんや」と、原田さんは控えめな感謝を漏らします。



原田太郎さん（67歳）
2003年3月　脳卒中→左まひ
2007年6月　前立腺がん

はらだ・たろう●神奈川県在住。運送業、芸能プロダクションなどを手がけ、60代で居酒屋の厨房へ。闘病後はリハビリ経験を生かした発明に勤しみ、現在はNPO法人「たくみ21」代表理事。妻の民子さんと二人暮らし。

待てども来ない救急車にキレた

2003年3月21日。

原田さんが脳卒中（脳出血）の兆候に気づいたのは、左手足の指の感覚が1本1本なくなっていったことでした。ろうそくの火が消えていくような不気味さにゾッとして、急いで自ら救急車を呼びます。

「なのに、待っても待っても来なくて、どうなってんだってもう一度電話したら、救急の車のくせに『今出たところです』って。蕎麦屋じゃねえんだからヨ！」

病院に着いたところで意識を失い、脳内の血液を24時間かけて抜いた治療後、目覚めた時は体にまったく力が入らない状態にショックを受けます。

「これはただ事じゃないと、無茶苦茶な不摂生を今さら反省したけれど、もう遅すぎた。飲む・打つ・買うより悪い、飲む・飲む・喫むの生活で、体重100kg以上の超肥満体だったからね。突然倒れるというより、来るべきものが来たってとこです」

それでも、今まで病気らしい病気に一度も縁がなかったため、妻の民子さんは本人から電話があった時、「何かの冗談かな」と思ったそうです。

「忘れもしません、心配で駆けつけた私の顔を見て第一声が『おまえ、ザマミロと思ってんだろう』ですって。いくら家族に後ろめたいところがあったと言ってもねえ（笑）」

それでも民子さんは娘さんとともに、病院まで往復5時間かけて毎日通い、20日後には家から近いリハビリ病院に転院しました。